

## 函館市における住宅建築の外観デザインとその分布状況

### —都市形成過程との関係性に着目して—

#### A study on facade designs and distribution of House-Architecture in Hakodate City

-Focus on the relationship with urban history-

渡辺翼\*・松井大輔\*\*

Tsubasa WATANABE\*・Daisuke MATSUI\*\*

Residents and municipality of Hakodate City has preserved the historic environment for a long time. On the other hand, Hakodate has the problem which is deterioration of the living environment. We think renovation of various house-architectures that reflected historical background (historic house-architecture) have potential to solve this problem. This study aim to clarify distribution, facade designs of house-architectures, and the relationship between them and the urban history of Hakodate. The results are as follows:(1)We extracted 1441 buildings as historic house-architecture. (2)Through the analysis from several phase, various type of historic house-architectures distribute like a mosaic. (3)Relation seems to exist historic house-architecture and urban formation period. (4)We should improve these considering the historical value of building.

Keywords:Hakodate, House-Architecture, Facade design, Urban history, Living environment

函館、住宅建築、外観デザイン、都市形成史、住環境

### 1. はじめに

#### 1-1. 研究の背景と目的

高度経済成長期以降、経済的利益を追求した過度な開発により、地域特有の景観などの歴史的環境が失われてきた。近年は、地域の持つ歴史的環境を活かしたまちなみ保全が全国各地でみられるようになってきている。中でも歴史的資源の観光振興に向けた活用が、急速な人口減少化下にある地方都市におけるまちづくりの一環として各地でみられる。

歴史的資源の保全による観光振興が進む一方で、住環境の整備に向けた利活用は発展途上である。歴史的環境を活かした観光は、基本的には、保全の結果として期待されるべきものであり、地域住民の生活の利便性向上及び生活の質的向上が、まず目標とならなければならない<sup>1)</sup>。また、歴史的環境を住環境の一部として、その価値を再認識することが、「生活一観光」という二項構図でない、新たなまちづくりの展開へとつながると考える<sup>2)</sup>。

加えて、歴史的環境を活かしたまちづくりにおいて都市の歴史を知ることは重要である。都市のいわば「骨相」とでもいえるものを見つめることで、一見無個性に見える風景の背後に手がかりとなる個性がにじみ出しているのを見出すことができる<sup>3)</sup>。

本研究が対象とする函館市では、夜間景観や赤レンガ倉庫群などの歴史的環境を活かした観光地化が進んでいる。特に西部地区では「洋風町家」と呼ばれる和洋折衷の建物が北海道の中でも早期から見られ<sup>4)</sup>、「都市景観形成地域」や「伝統的建造物群保存地区」(以下、伝建地区)の指定など、景観保全に向けた取り組みが行われている。一方で、西部地区を含めた広範囲で、空き地や空き家の増加が深刻化しており、住環境の側面においては課題が見られる。

函館市の中心市街地は大正期の十字街から始まり、松風町、五稜郭及び美原へと徐々に郊外へと移り変わってきた。すなわち、西部地区以外にも成立時期の異なる歴史的環境が広がっており、これらの地区では建築物が持つ特性もそれぞれ異なることが想像できる。しかしながら、それらの歴史的価値は未だ評価されていないため、歴史的背景を踏まえつつ再認識することが急務だと言える。

そこで本研究では、函館市内の住居として利用される、あるいは利用されていたと考えられる住宅建築に着目し、(1)分布状況、(2)外観デザイン及び(3)都市形成史との関係性の3点を明らかにする。これらを明らかにすることで、函館市の住環境改善に向けて、歴史的価値という視座から示唆を得ることを目的とする。

#### 1-2. 研究の位置づけ

函館市における建造物に着目した研究には、主に和洋折衷の様式を有する「洋風町家」を対象とした研究<sup>4)5)</sup>が多く、そのほとんどが伝建地区を始めとした、西部地区内を対象に行われている。一方で、函館市全体としての調査はなされておらず、その歴史的価値は明らかになっていない。

西部地区以外を対象とした研究としては、洋風町家と並んで函館の象徴とされる明治11年及び12年大火後の防火建築に関する研究<sup>6)</sup>や、開発文化村や都市計画区域外における宅地開発に関する研究<sup>7)8)</sup>、港湾開発と土地利用計画の相互関係に関する研究<sup>9)</sup>などがある。また、住環境の視点から論じている研究としては、生活利便性や市電などの交通計画の観点から、函館市郊外における宅地の活用について述べた研究<sup>10)</sup>や、西部地区を対象とした住民の歴史的環境の活用意識に関する研究<sup>11)</sup>、都市景観形成地域や西部地区における路地の分布及び空間特性を把握し、住環境保全に向けた活用に対し

\* 非会員・新潟大学大学院 (Niigata univ.)

\*\* 会員・新潟大学工学部工学科 (Niigata univ.)

て示唆を述べた研究<sup>12)13)</sup>などがある。

本研究は、函館市街地の大部分を対象に住宅建築のデザインを取り扱う点、及びこれらを歴史的環境の一部と捉えて住環境の将来像について示唆を得ようとする点に特徴がある。

### 1-3. 研究方法

調査はまず、次項で述べる調査対象建造物について、インターネット地図機能を用いた調査<sup>1)</sup>及び現地における目視による確認を行なった。次に、調査対象建造物が建設されたとされる時期の都市域を、史料収集により把握する。

## 2. 対象建造物等の定義と分布状況

### 2-1. 対象建造物の定義 (図1)

本研究では、住環境の実態を把握するため、用途が住居・店舗の建造物を対象とする。また、主従関係を持つ建造物が別々の棟としてある場合、それらの内、中心的に用いられるものを主屋として調査対象とする。次に、地域特有の歴史的背景が形態や様式に反映されている建造物を抽出するために、ハウスメーカーによる建売住宅やマンション、アパートといった集合住宅のような地域性を持たない建物は「一般住宅建築」として分析の対象外とし、それ以外を「歴史的住宅建築」と定義する。なお、既往研究では歴史的建造物の定義は明確になされておらず、戦前あるいは築50年以上とするものなどがある。本研究では、先に述べた抽出手法を選択するため、戦後の建物も含むものとする。最後に、ここで定義した歴史的住宅建築のうち、大規模な改修が実施され、外観調査からは判断できない建物は分析の対象外とする。

### 2-2. 都市形成の過程と調査対象範囲

都市形成過程に関わる事項について、函館市史<sup>15)16)</sup>より抽出した。都市形成過程は以下の4時期に分ける(図1)。

港湾開発展開期(-1907)は、1859年に函館港が開港し、弁天砲台地や若松町の埋立のほか、函館港周辺の開発や整備が行われた時期である。1902年には函館駅が開業し、都市域が拡大したと考えられる。

明治40年大火発生日(1908-1912)は、木造密集が延焼の一要因とされ、復旧が行われた時期である。この大火後の5年

間に人口の増加が停滞したこと、財政難であったことから、都市域はさほど拡大しなかったと考えられる。

都市基盤整備期(1913-1934)は、北洋漁業の拠点として都市規模が拡大した時期である。1913年に函館水電株式会社が設立され、路面電車開業した。また、1922年の市制施行、1926年の市街地建築物法の適用なども都市基盤の整備を促し、都市域が拡大したと考えられる。

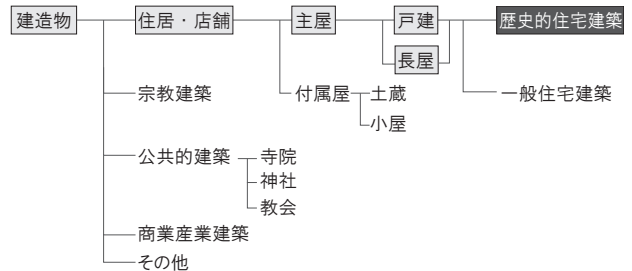
昭和9年大火発生日(1935-1948)は、函館史上最大の大火が発生した時期である。函館土地区画整理事業が実施され、大火範囲内の復興が優先されたと考えられる。

以上を踏まえ、各時期における都市域を古地図より把握し、調査対象範囲とする。

### 2-3. 歴史的住宅建築の分布状況

函館市において、歴史的住宅建築は、1,441棟分布している。

地区別<sup>14)</sup>にみると、西部地区で574棟、中央部地区で854



凡例 □ 調査対象となる建造物の種類 ■ 対象建造物

図1. 調査対象建造物の定義

表1. 配置形態

	接道	準接道	半接道	非接道
接隣/準接隣	前面道路 町家式	準町家式	準町家式	町家型屋敷式 準屋敷式
片接隣	屋敷型町家式 町家型屋敷式	屋敷型町家式 町家型屋敷式	屋敷型町家式 町家型屋敷式	町家型屋敷式 屋敷式
非接隣	屋敷型町家式 町家型屋敷式	屋敷型町家式 町家型屋敷式	屋敷型町家式 町家型屋敷式	町家型屋敷式 屋敷式

凡例 ■ 町家系配置 □ 屋敷系配置 ▲ 入口方向

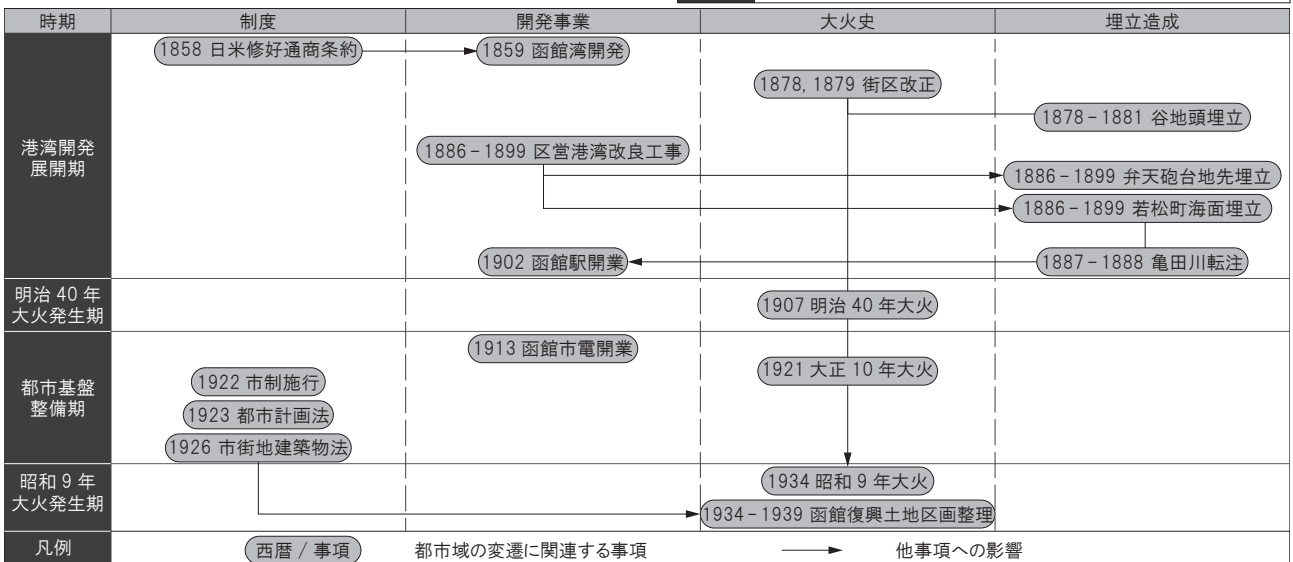


図2. 都市形成時期区分



No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	
町名	入船町	船見町	弥生町	弁天町	大町	末広町	元町	青柳町	谷地頭町	住吉町	宝来町	東川町	豊川町	栄町	旭町	
棟数	22	21	37	43	18	32	44	33	30	9	60	35	21	31	23	
No.	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	
町名	大手町	東雲町	大森町	松風町	若松町	千歳町	新川町	上新川町	海岸町	大縄町	松川町	万代町	亀田町	大川町	白鳥町	
棟数	18	12	26	31	28	11	43	16	29	51	89	32	19	5	0	
No.	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	
町名	八幡町	宮前町	中島町	千代台町	堀川町	高盛町	宇賀浦町	日乃出町	的場町	時任町	杉並町	本町	梁川町	五稜郭町	柳町	
棟数	10	29	66	61	55	53	19	12	26	31	34	43	12	7	3	
No.	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	西部地区		中央部地区	東央部地区	北部地区	計
町名	松陰町	人見町	金堀町	乃木町	柏木町	川原町	駒場町	追分町	吉川町	北浜町	西部地区		中央部地区	東央部地区	北部地区	計
棟数	22	29	4	13	30	9	0	1	3	0	574		854	9	4	1441

【補注】 凡例は図 2-2. に同じ

図 3-1. 区画別にみた住宅建築の外観デザイン (1)



図 3-2. 区画別にみた住宅建築の外観デザイン (2)

棟、東中央部地区で 9 棟、北部地区で 4 棟分布している。以上のことから、1949 年頃までに形成されたと推察される都市域内では、中央部地区内で最も残存しているといえる。

町別にみると、松川町が最も多く、89 棟分布している<sup>(2)</sup>。次いで、中島町が 66 棟であり、いずれも中央部地区に分類される町に該当する。

形態・意匠などの項目別(表 2)にみると、階数は 2 階建て以上のものが多く、747 棟である。2 階建て以上のものは西部地区で 407 棟と全体の半数以上を占める一方で、平屋建ての住宅は中央部地区で 517 棟あり、全体の 7 割以上を占める。屋根材料は 1,391 棟とほぼ全てでトタン屋根が用いられており、寒冷地における特徴がみられる。屋根形状は西部地区では切妻が 233 棟、寄棟が 237 棟と同程度である。一方で、中央部地区では切妻が 470 棟あり、寄棟 225 棟の倍以上である。外壁は、モルタルが 528 棟と最も多く、次いでトタンが 506 棟みられた。また、和風下見板と洋風下見板の比較では、洋風下見板が和風下見板の 4 倍近く確認できた。これは函館における洋風要素の早期混入が要因と考えられる。配置形態<sup>(3)</sup>(表 1)は、町屋式が 1,009 棟と大半を占める。次いで屋敷式が 112 棟である。西部地区より他地区の方が屋敷式の割合がやや多い傾向にある。最も多くみられた細部意匠は、持送りで 94 棟で確認された。次いで、出格子が 52 棟、軒蛇腹が 35 棟で確認された。これらの意匠は、主に函館市における伝統形式である洋風町家でも用いられている。

### 3. 歴史的住宅建築の外観デザインの類型化と分布

#### 3-1. 形態による分類と分布傾向

函館市における歴史的住宅建築の形態について、規模及び屋根形状の組み合わせにより分類を行う<sup>(4)</sup>(表 3)。

対象範囲全域において、Type.A の形態が 243 棟と最も多い。

地区別にみると、西部地区では Type.D が 107 棟で最も多い。次いで、Type.E 及び Type.K がそれぞれ 88 棟、82 棟であることから、全域とは異なる傾向にある。また、Type.E のような寄棟 2 階建ての形態は、既往研究<sup>(4)</sup>にある函館の伝統形式と一致する。中央部地区では、Type.A が 188 棟で最も多く、次いで Type.G が 125 棟である。また、東中央部地区及び北部地区では、13 棟中 12 棟とそのほとんどが切妻屋根である。以上より、地区ごとに異なる形態の特徴がみられる。

#### 3-2. 外観デザインによる分類と分布傾向(図 3)

歴史的住宅建築の外観を特徴づけている要素を抽出し、その組み合わせから 12 タイプに分類する<sup>(5)</sup>(図 4, 表 4)。

町別にみると、最も多いタイプは Type.9 であり、西部地区南側から亀田川右岸、東中央部地区にかけた津軽海峡に面する町が特に多い。次いで Type.5 が多く、弁天町や大町など、西部地区西側で優勢の傾向にある。西部地区東側や中央部地区では Type.11 が優勢である町が多い傾向にある。

区画別にみると、Type.6 が優勢の区画が西部地区西側に位置する大町などでみられる。また、西部地区東側の青柳町で Type.5 が優勢の区画が見られる。Type.9 が優勢の町が大半を占める中央部地区東側では、Type.5 が優勢の区画が点在して

いる。加えて、Type.7 及び Type.8 が優勢の区画が線的に連続して存在する。以上のことから、区画単位でみることで、町全体としての傾向とは異なるタイプが優勢な区画がみられる。

### 4. 都市形成時期と歴史的住宅建築の外観デザインとの関係

港湾開発展開期、明治 40 年大火発生期、都市基盤整備期、昭和 9 年大火発生期という 4 つの都市形成の時期と歴史的住宅建築の外観デザインとの関係性について分析を行う(図 2)。

港湾開発展開期に形成された範囲内では、Type.11 が優勢の区画が最も多く、主に函館湾周辺の地域を中心にみられる。明治 40 年大火範囲内では、29/64 区画と約半数近くの区画で Type.1 から Type.6 が優勢だった。これらのタイプは、和風や洋風などの様式を伴った外観デザインを有するもので、

表 2. 各項目別における住宅建築の分布数

調査項目	階数 [ 棟 ]		屋根材料 [ 棟 ]				
	1 階	2 階以上	瓦	トタン	スレート	他	
西部地区	167	407	27	542	13	1	
中央部地区	517	337	12	836	8	0	
東中央部地区	8	1	0	9	0	0	
北部地区	2	2	0	4	0	0	
計	694	747	39	1,391	21	1	
調査項目	屋根形状 [ 棟 ]						
	切妻	寄棟	入母屋	陸屋根	片流れ	複合 / 他	
西部地区	233	237	2	8	12	82	
中央部地区	470	225	8	12	46	93	
東中央部地区	8	0	0	0	0	1	
北部地区	4	0	0	0	0	0	
計	715	462	10	20	58	276	
調査項目	外壁 [ 棟 ]						
	土	板	和風下見板	洋風下見板	漆喰	煉瓦	
西部地区	9	30	69	176	25	5	
中央部地区	17	28	16	146	8	0	
東中央部地区	0	0	0	1	0	0	
北部地区	1	0	0	0	0	0	
計	27	58	85	323	33	5	
調査項目	配置形態 [ 棟 ]						
	町屋式	準町屋式	屋敷型町屋式	町屋型屋敷式	準屋敷式	屋敷式	
西部地区	447	45	12	22	23	25	
中央部地区	560	55	57	49	50	83	
東中央部地区	0	3	1	1	2	2	
北部地区	2	0	0	0	0	2	
計	1,009	103	70	72	75	112	
調査項目	細部意匠 [ 棟 ]						
	持送り	妻壁	小壁	軒蛇腹	出格子	その他	
西部地区	65	9	15	32	37	33	
中央部地区	29	2	12	3	15	5	
東中央部地区	0	0	0	0	0	0	
北部地区	0	0	0	0	0	0	
計	94	11	27	35	52	38	

表 3. 住宅建築の形態による分類

間口	小						大					
	1 階			2 階以上			1 階			2 階以上		
階数	切妻	寄棟	他	切妻	寄棟	他	切妻	寄棟	他	切妻	寄棟	他
Type	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
西部地区	47	33	11	107	88	38	33	34	9	46	82	46
中央部地区	188	69	24	92	44	44	125	78	33	65	34	58
東中央部地区	7	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0
北部地区	1	0	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0
計	243	102	35	199	132	83	160	112	42	113	116	104

この時期はそれが採用される傾向が高かったと推察できる。次に、都市基盤形成期に形成された範囲ではType.9が最も多かった。同様に、昭和9年大化範囲内でも、Type.9が104/343区画と多くの区画で優勢となっていた。したがって、次第に様式を持たない没個性型の外観デザインが主流になっていった変化を読み取ることができる。

### 5. 結論

(1)函館市における歴史的住宅建築は1,441棟である。地区別及び町別では、中央部地区の854棟と松川町の89棟がそれぞれ最多であった。

(2)町別にみるとType.9、次いでType.5が優勢な傾向にある。区画別にみると、西部地区でType.6、中央部地区でType.7、Type.8及びType.11が優勢な区画がみられるなど、町の傾向をみたときには埋没する優勢なタイプがみられる。

(3)都市形成の過程は、港湾開発開期、明治40年大火発生期、都市基盤整備期及び昭和9年大火発生期の4時期に分けられる。明治40年大火範囲までは和洋問わずに様式を持つ建物が多かったが、それ以降は没個性化していったという過程を読み取ることができる。各時期における開発や整備、大火といった歴史的事項が、住宅建築に歴史的背景として反映されていると考えられる。

(4)函館市において、これまで歴史的環境として認識されてこなかった西部地区以外にも歴史的価値を有する住宅建築が散在するといえる。そのデザインは、主に西部地区とそれ以外で異なる傾向がある。区画レベルや線的に異なる特徴を持つ場所もあり、歴史的住宅建築の再生や活用においては、これらの違いに対する細かな配慮をしながら整備を行っていくことが望ましい。

### 【補注】

- 参考文献17)より、『まちなみはたいい道路の両側に並びわゆる「道路景観」である。そこには町の特徴、あるいは同じ町の中でも地区ごとに個性が表れている。』とある。本研究においては、函館市全域の住宅建築を広域的に網羅するため、調査は google ストリートビューを用いて行う。ただし、閲覧不可と判断した道路については現地にて目視より調査を行う。
- 白鳥町、駒場町、及び北浜町の一部地域は、本研究の調査対象範囲内であるが、対象となる建造物は確認できなかった。
- 配置形態は参考文献18)を参照し、本研究では、町屋型、準町屋型、屋敷型町屋型、町屋型屋敷型、準屋敷型及び屋敷型の計6種類に分類する。
- 規模については、間口が平均(4.72間)以上の「間口大」と平均未満の「間口小」に分類する。さらに階数によって「1階」及び「2階以上」に分類する。調査より、数の多かった「切妻」と「寄棟」を抽出し、複数の屋根形状を棟内に有する建造物及び前述した「切妻」、「寄棟」以外の屋根形状を有する建造物を「他」として分類し、計9タイプに分類する。
- 分類は、まず玄関口の数より判断し、棟内に有する戸数について分類する。ただし、建築当初より戸数が減少していると判断した建造物については、建築当初の戸数とする。次に、建物の形式の有無を判断し、分類する。形式を有する建造物については、既往研究等を参考に、北海道及び本州でみられる歴史的建造物と同様の形式を持つ「伝統形式」、前面に屋外広告物等の看板の意匠を施されている「看板建築」、及びいずれにも該当しない「その他」に分類する。また、形式がないものについては、参考文献19)を参照し、北海道における「開拓使の洋風建築様式を継承して、簡素単純な意匠」の特徴を有する「没個性建築」として分類する。様式については、まず、和風及び洋風の特徴を壁面や細部意匠などより判断する。さらに要素の混在程度によって「純和風」、「準和風」、「準洋風」及び「純洋風」に分類する。和洋折衷と判断した建造物については、棟内に和風と洋風の建造物が併設している「平面混在」と、1階部分に和風、2階部分に洋風の特徴を持つ「立面混在」に分類する。ただし、階数が「1階」の建造物については、2階部分を有さないため、立面混在は存在しない。看板建築については、まちなみへの影響を及ぼす前面に施されている装飾の程度によって、計2タイプに分類する。

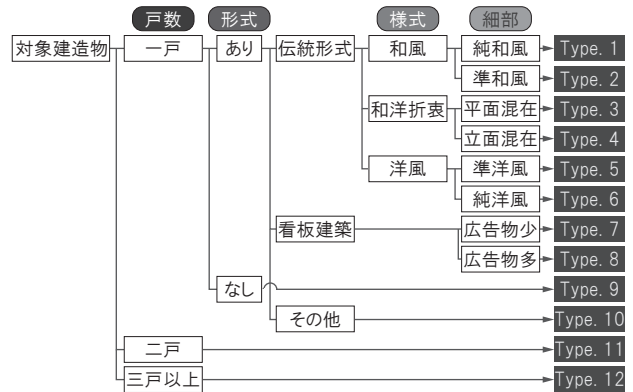


図4. 住宅建築の類型樹形図

表4. 住宅建築の外観デザインによる分類

種類	Type.1	Type.2	Type.3	Type.4
名称	純和風型	準和風型	和洋平面混在型	和洋立面混在型
写真				
種類	Type.5	Type.6	Type.7	Type.8
名称	準洋風型	純洋風型	看板建築型 I	看板建築型 II
写真				
種類	Type.9	Type.10	Type.11	Type.12
名称	没個性型	その他	二戸一長屋型	長屋型
写真				

### 【参考文献】

- 西村幸夫(2004)、『都市保全計画』, pp.14-24, 東京大学出版会
- 西村幸夫ほか(2009)、『観光まちづくり - まち自慢からはじまる地域マネジメント -』, pp.45, 学芸出版社
- 西村幸夫(2018)、『県都物語』, pp.1-21, 有斐閣
- 中川武・角幸博・小澤丈夫・石本正明・池上重康(2007)、『明治大正期函館の和洋折衷町家』, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.493-494
- 竹鼻紫・大村謙二郎・有田智一・藤井さやか(2010)、『伝建地区とその周辺における空き家実態とその利活用可能性に関する研究 - 函館市西部地区を対象として -』, 都市計画論文集, No.45-3, pp.25-30
- 越野武・角幸夫・北村俊久(1986)、『明治中期(11,12年大火後) 函館の中心市街とその建築』, 日本建築学会計画系論文報告集 第360号, pp.102-112
- 玉木大樹・越野武・角幸博(1995)、『函館市東部旧「開発」の住宅地形成について(1)「開発文化村」ほか2村』, 日本建築学会北海道支部研究報告集 No.68, pp.609-612
- 桑田智子・越澤明(2003)、『函館市において都市計画区域外から市街化調整区域に編入された地域での宅地開発問題』, 日本建築学会技術報告集 第17号, pp.443-448
- 伊藤涼祐・松井大輔(2019)、『幕末・明治初期に開港した地方都市における港湾開発と土地利用計画の相互展開』, 都市計画論文集 Vol.55 No.3, pp.259-266
- 星卓志ほか(2020)、『人口減少下にある函館市における郊外市街地の変化実態に関する研究』, 日本建築学会計画系論文報告集 Vol.85 No.767, pp.89-99
- 菊池諒(2018)、『函館市西部地区における歴史的市街地の店舗活用と活用者の居住地選択に至る経緯 - 歴史的環境に対する意識に着目して -』, 平成29年度新潟大学卒業論文
- 沢畑敏洋・松井大輔(2018)、『函館市都市景観形成地域内における路地の分布と空間特性に関する研究』, 日本建築学会学術講演梗概集, pp.159-169
- 渡辺翼・松井大輔(2019)、『函館市西部地区における路地の分布と空間特性 - 多様性を生み出す地形的要因と歴史的要因 -』, 日本建築学会学術講演梗概集, pp.1071-1072
- 函館市 都市建設部 都市計画課, 『都市計画マスタープラン』, 日本語, <https://www.city.hakodate.hokkaido.jp/docs/2014011700062/>, 2020.11.19
- 函館市編さん室(1900)、『函館市史通説編2』, pp.460-560, 函館市
- 函館市編さん室(1900)、『函館市史通説編第3巻』, pp.717-738, 函館市
- 観光資源保護財団(1981)、『歴史的町並み事典』, pp.32-39, 柏書房
- 渡辺篤史・岡崎篤行(2016)、『歴史的建造物群に関する基礎的かつ広域的な調査方法の提案 - 町屋を中心とした町並みの残存状況及び外観特性を把握する手法として -』, 日本建築学会技術報告集 No.22 Vol.50, pp.313-318
- 遠藤明久(1994)、『北海道住宅史話(下) 日本住宅亜種の誕生へ』, pp.133-138, 住まいの図書館出版局